

直信流柔道について。II

藤岡 正春*

Masaharu FUJIOKA
JIKISHINRYU JUDO II

[キーワード：柔術，柔順，不動心]

1. 緒言

柔道の創始にあたって嘉納は「唯々幾分かの改良を加えさえすれば、柔術は体育智育徳育を同時に為すことの出来る一種の便法と成ることが出来ると申せようと存じます。それで私は数年間工夫を凝らし遂に一種の講道館柔道と云ふものを拵^{つと}へたる¹⁾」²⁾と言い、柔術を母体にして柔道が集大成された。この柔術について「柔術には流派が幾個も有りまして、均しく柔術と云ふ名称で同じ様なことを致します（中略）又體術、和、柔道、小具足、捕手、拳法、白打、手持など、種々の名称が御座いますが、皆一種の柔術です³⁾」⁴⁾と言い、総括すると「無手或は短き武器を持って居る敵を攻撃し又は防御するの術⁵⁾」⁶⁾と言っている。この柔術の技術内容を見ると、堤宝山流では「刀槍・鎧組（鎧を着用して組打ちする柔術）の他に太刀・柔・小具足・鎖鎌・棒・薙刀・弓・馬・振杖⁷⁾」⁸⁾、また竹内流では「柔、捕手、小具足、拳、棒、仗、居合、薙刀、繩、短劍、浮沓⁹⁾」¹⁰⁾などである。その他「長巻、手裏劍、乳切木、鎖鎌、軍法、鉄扇、十手、騎射」等にまで及ぶ総合武術であり、戦場に於ける鎧組打ちという実戦の中で培われた武術が集大成されたものである。これらの柔術の中で最古の柔術は、小具足の術を主とするところから堤宝山流（慈恩・14世紀後半）が最も早く成立した流派と言う説もあるが、現存する歴史的資料で確認できる最古の柔術は天文元年（1532年）に創始された竹内流である。

気楽流拳法、柔道秘術之伝、捕手柔術の源に「吾朝に柔術といふ事、往古はなかりし也。唯相撲を以て戦場組討の習いとし、是を武芸の一つとせし也¹¹⁾」¹²⁾、また登假集の“古より相撲を以て柔術修行の事”項に「古より武芸

の終始組討なる事、雖能知、柔組討といふ名目なく、唯武士の若き者集まり、相撲を以て身をこなし、理気味を去り、軀を和らかになして、一心正しくする事のみ執行せし事なり¹³⁾とあるように、相撲（武家相撲又は練武相撲）が戦場組打のための基礎となる体力養成の手段として又、実戦での経験や工夫等組討術修練の方法として重要視されていたことが分かる。

この相撲は奈良・平安時代に行われていた三度節の一つである節会相撲から発展したものである。この節会相撲の最も古い記録は神亀6年（734）7月7日の天覧相撲である。貞観10年（868）に式部省から兵部省へ所管変えになるまで、式典的要素や娯楽的要素が高く練武的要素の低いものであったが、所管変え以降練武的要素が高まると共に式典的要素や娯楽的要素は徐々に稀薄となっていた。

この節会相撲は、古事記の鹿島神宮の祭人である建御雷神と建御名方神が出雲の国を掛けて争った政治上の戦い（関節技が主）や日本書記の野見宿禰と当麻蹴速の力競で、相手を蹴り殺した徒手による打つ・蹴る・投げる・関節を取る等の方法で行われた古代の格闘技である争力（チカラクラベ）や柄力（スマイ）が発展したものである。

相撲は日本人の農耕生活と深い関わりをもつ。即ち、水稻の栽培は勤勉と忍耐・工夫に加え天候の影響を受けるため、時を定め相撲・弓射・踊りなどにより豊作を祈った。これが神事相撲へと発展する。そして食・住の安定に伴う流通経済の発展は、階級の分化とともに貴族社会の成立、同時に神事相撲は節会相撲の形式（三度会＝正月の射礼、五月の騎射、七月の相撲）を取り、定例化され、高倉天皇承安4年（1174）平安朝の終りによって

* 島根大学教育学部保健体育教育研究室

記録が絶つまで続いた。

この様に柔道・柔術・組討（武家相撲・練武相撲）・節会相撲・神事相撲・徒手の格闘技と際限無く遡る。この様な柔術の発展過程に於ける起倒流系柔術の一流派である直信流柔道について、第一報において、起倒流及び直信流柔道の成立や直信（心）流柔術・柔道の名称、技法（変化）等について報告した。

そこで本研究では、柔術という名称について、十三代師範、松下善之丞の直信流柔道業術寄品巻（柔説・柔演・柔第・警・歌）、直信流柔道業術書（本意・精粗・運轉・移響）にみられる思想について報告する。

2. 柔術という名称について

柔術の発展過程において大陸から技術的・精神的に大きな影響を受けている。技術的にみると、古くは日本書記にある野見宿禰と当麻蹴速の力競で「二人相対立、各拳足相蹴、則蹴折當麻蹴速之脇骨、亦踏折其腰而殺之」⁸⁾とあって相手を蹴り殺した技術内容や『蹴速』と言う名称から速く蹴る技を習得していたと推察されること等早くから中国拳法の影響を受けていたと考えられる。また近世においては本朝武芸小伝の巻之十、拳に「陳元賛かたりて大明に人をとらふる術あり、我其術しらずといへど能其技をみつると云、三人の士、其術を聞き、みずから其技を工夫し出して、後能其事に熟せり（中略）この術の理は、柔にして敵とあらそわず、しばしば勝たむ事を求めず。虚静を要し、物をとがめず、物にふれ動かず、事あれば沈みて浮かばず、沈み感ずると云ふ。凡そ調息を要とす」⁹⁾とある。明の帰化人陳元賛の教えを受けた三人の士は後に、福野流（この道統は良移心当流、起倒流・直信流柔道、主に講道館柔道の投技へと続く）、磯貝流、三浦流を創始している。また秋山四郎兵衛義時は医術研究のため支那に渡り、医術の他博転という者から向打3手、武官という者から捕手28手を学び、帰朝後創意工夫して303手の術に発展させ、秋山揚心流（この道統は主に講道館柔道の固技へと続く）を創始している。

この柔術という名称についてみると、本朝武芸小伝の巻之九に「小具足捕縛はその伝来久し、専ら小具足を以て世に鳴るものは竹内なり、今之を腰之廻りと云ふ」¹⁰⁾とある。この小具足捕縛とは「今一術を示さんと即ち彼木刀を取て、長さに益無しと之を二つに切る。小刀となし、之を携えて曰く、之を帯せば小具足也」¹¹⁾「小具足組討以て腰の廻りと号す」¹²⁾と言われ、剣術や弓術、馬術等と同様に用兵（武器）を以て術名としている。このように柔術の初期には小具足や腰之廻り、捕手、組討、体術等と

呼ばれていたが、関口柔心自序『新心流柔之序』（寛永8年・1631）に「余嘗従命適東武、時拳世有称柔者」¹³⁾とあり、柔術という名称は元和（1615～1624）から寛永年間頃（1624～1644）に使われはじめたと考えられる。

この柔術の「柔」という語の出典は定かではないが、七書の一つ黄石公三略（上略）の「軍讖に曰く、柔能く剛を制し、弱能く強を制す。柔は徳なり。剛は賊なり。弱は人の助くる所、強は怨の攻むる所」と言う「柔能剛制、弱能強制」から出ていると言われる。この「柔」は、老子の思想で極尊された柔の徳に基づくもので「柔こそ宇宙の大法、自然の理法である。老子の柔弱とは絶対の柔弱であり、絶対の柔弱は絶対の剛強である。全て絶対の域に至れば、柔もなく、弱もなく、剛もなく、強もなく、柔剛の相対もなくなる」と言うものである。この柔に対する考えは水の性質（水の五徳）「①水はどんな形にも逆らわない。②水は地下水になって派手ではないが万物の根源である。③水は清濁合していく。④ある時は静かだけれどもある時は怒涛の如く激しい。⑤理に逆らわないで自身で流れをかえる」、即ち「水は方円の器に従う」柔軟・従順さに譬えられ、説かれている。このような考え方に基づいて渋川流・柔術大成録、名義には「柔は柔順の義にて、此形をして能く心に柔順ならしむるの方術と云意にて柔術と名付けたるなり。即ち柔順と云は、易経の字にて、人の気質の上でいはば、女徳のすなほにして物にさからはず、何事も手前おしなべて人次第になることなり」¹⁴⁾と言ひ、直信流柔道業術寄品巻・柔第には「夫れ乾坤の間に性を稟くる者貴となく賤となく、寛柔温和の道徳は天然に備え有つ所なり。是れに随順する、これを目して柔道と謂う」¹⁵⁾とある。また渋川流・柔術大成録、祖君稽古規には「易に曰く、天地之道を立つ。曰く、柔と剛与。又曰く、神一元資りて生ずれば乃ち天に順一承す。蓋し心は譬えば則ち天也。形は譬えば則ち地也。而して形能く柔順なるときは則ち物を成す。弱強なるときは則ち必ず敗る。故に勢法に由つて之を学び、時に之を温一習し於己に反り一求め、而其邪を開ぎ孜々として已不、思いを尽し徳を積み、弱強之形変化して以て柔順なら使むるときは焉、則ち進一退動一止意に随いて事を承け、以て物を成すに至る。是を柔術と謂う。乃ち生々之妙に頼って而柔剛之徳を成所以也」¹⁶⁾と在る。即ち、柔術の柔は柔順の柔であり、相手の動き（攻撃）に逆らわずに順応して技を施すと言う柔術の技法の根本原理（柔の理）と思想が合致した名称である。

このように術名を用兵以外の思想的表現を用いている所に特徴があり、中国武術や思想（儒学・易学・禪）が日本古来の小具足や体術等に大きな影響を与えて新しい

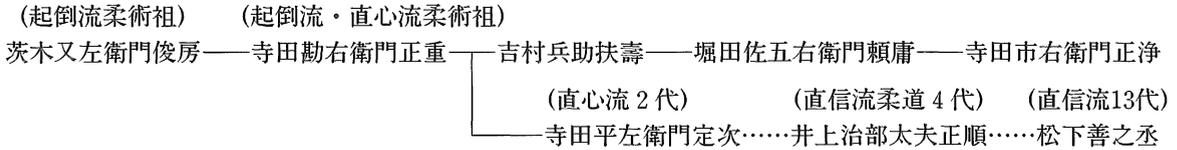


図1. 起倒流・直信流系譜

領域を加えると同時に柔術の近代化の第一段階に果した役割の意義は大きい。

3. 柔術伝書中にみる思想的用語(禅・朱子学)

柳生流の門弟である福野七郎右衛門正勝は、柳生新陰流の剣理に内在する『和』(柔の理)から良移心当流を創始、また同門の茨木専斎俊房は『乱』から起倒流を創始した。そして直心(信)流は、開祖・寺田勘右衛門正重満英が父定安から貞心流和術、叔父頼重より良移心当流(福野流)を学びながら刀槍弓馬及び諸家の戦法を学ぶ。更に深山に籠り仙人より長生の方を伝授される。是より禅を沢庵に学び、不動体・不動智の妙利を發明する。また林道春に儒を学び直心流柔術を創始した。

このような起倒流柔術の成立過程から起倒流系柔術伝書には、沢庵禅師が禅の立場から剣の心法を説いて柳生但馬守宗矩に与えたと言われる不動知神妙録や理気差別論、そして朱子学の言葉が多く見られる。

起倒流・柔術伝書中(本体・天の巻・地の巻・性鏡)の沢庵の言葉、同じく登假集の中の沢庵の言葉、朱子学(中庸、大学、論語)の言葉を見ると、次のようになる。

まず起倒流伝書中の沢庵の言葉を見ると「水上の胡芦子の事」¹⁷⁾(至りたる人の心は、卒度も物に止らぬ事なり。水の上の瓢を押すが如くなり・不動智神妙録)、「気体の事」¹⁸⁾(人の身に気と物、心の外にあり。是を何ぞといえ、先ず根本の元氣と申すもの也・理気差別論)、「前後際断の事」¹⁹⁾(前の心をすてず、又今の心を跡へ残すが悪敷候なり・不動智神妙録)、「性・心・気・機」²⁰⁾(天地のあいだに一つの理といふものあり。この理感じうごきて、気といふ物に交じ候・中略・人の身に一つの性と申す物の候。此性と申すは何ぞといへば、天地のあいだに一つの理といふ物ありと、口にかきつけ候。其理、人に身にうけては性といひかへたる物に候・中略・此性に何なりともむかへば、むかふものがうつりて、すなわち心と成るなり。むかふものに此の性がうごくを心と申し候・理気差別論)、「石火」²¹⁾(石火の機と申すも、ひかりとする

電光の速さを申す也・不動智神妙録)等がある。

起倒流伝書中の朱子学・易学の代表的な言葉を見ると、天の巻に「起倒は、をきたをとと訓ず。起は陽の形、倒は陰の形なり。陽にして勝ち、陰にして勝ち、弱にして強を制し、柔にして剛を制す。我が力を捨て、敵の力を以て勝つ」²²⁾、地の巻に「敵に柔剛強弱の事」²³⁾、性鏡の巻では「天地は陰陽・五行の理に随って動き、人は、この理を享けて性といい、性に随って動く。理の動くを気といい、性の動くを心という」²⁴⁾等、易の陰陽説や三略の柔剛説を多く用いて説いている。

次に、登假集(寺田市右衛門正浄)中にも「性・心・気」²⁵⁾、「水上の胡芦子の事」²⁶⁾、「気体の事」²⁷⁾、「前後際断の事」²⁸⁾等の起倒流伝書と同様に沢庵の言葉があり、「無心無我」²⁹⁾(無心無念；心に何もなきを無心の心と申し、又は無心無念とも申し候・不動智神妙録)、「応無所住而生其心」³⁰⁾(万の業をするに、せうと思ふ心が生ずれば、其する事に心が止るなり。然る間止る所なくして心を生ずべしとなり・不動智神妙録)、「放心を求めて」³¹⁾(至極の時は、邵康節が心を放つを要すと申す・不動智神妙録)、「気を以て形を成す」³²⁾(兵法のかちまけも、身をはたさんも、たちをあげ身をひらき、とびあがりはしりかかり、さまざまのはたらきも、此機より出て、外にうごく物なり。大機大用とはこの事なり・理気差別論)、「敬」³³⁾(仏法にも敬の字の心有りて、一心不乱と同義にて候・不動智神妙録)、「不動智」³⁴⁾(心の動きたきように動きながら、卒度も止らぬ心を、不動智と申し候・不動智神妙録)、「忘心」³⁵⁾(本心は水の如く一所に留まらず、忘心は氷の如くにて、氷にては手も顔も洗われ申さず候・不動智神妙録)、「迷」³⁶⁾(兵法には、この止まる心を迷と申し候・不動智神妙録)等、心の持ち方が説かれている。

次に登假集中の朱子学の言葉を見ると「克己復礼」³⁷⁾(己に克ちて礼に復る。仁とす・論語顔淵)、「放心」³⁸⁾(学問の道他なし。其放心を求めのみ・孟子)、「静」³⁹⁾(止まるを知りて后定まりあり、定まりて后静か也・大学)、「明德」⁴⁰⁾(大学の道、明德を明らかにするにあり・大学)、「止於至善」⁴¹⁾(大学の道、至善に止まるにあり・大学)、

「性」⁴²⁾ (性に承ふ。之を道と謂・中庸)、「中和」⁴³⁾ (喜怒哀樂の未だ発せざるを中といい発して節に中るを和という・中庸)、「誠」⁴⁴⁾ (誠は物の終始也、誠は天の道也。之を誠にするは、人の道也・中庸)、「敬の道」⁴⁵⁾ (君子敬みて失無く、人と交わりては恭しくて礼有り・論語顔淵)等である。

このように仏語と朱子学の用語を多く用いて柔術の技法や心法を説き、柔術の在り方・目的を説いている。

4. 伝書にみる直信流柔道の思想

『柔道業術寄品巻』(資料1)¹⁵⁾

柔説

天に陰陽あり、地に剛柔あり。柔は陰に属し、剛は陽に属す。陽中に陰あり、陰中に陽あり。故に剛中に柔あり、柔中に剛あり。剛と強とは柔と弱とに類す。此れに類する四つは、各用うる所あり。剛強の柔弱に勝つことは、人皆知るところなり。然れども、柔剛を制し弱強を制するも、亦是れその理無きにあらず。天下の至柔の天下の至堅を馳騁(馬を駆け走す)するは、例えば金鉄の至堅の如し。然れども、時に糸綿の至軟を砕くことあり。然れども、能く柔の漸を折くあることなし。雷の石を穿ち、綆の幹を断つも、亦柔久なり。牙齒毀ると雖も舌独り存す。是れ柔弱能く剛強を制する所以なり。是を以て、剛健人を損することあらば、則ち人も亦これを怨む。柔弱人に順うことあらば、則ち人も亦これを愛す。此の四つは、一に偏してこれを用うべからず。これを兼ねるを宣しと為す。中柔の道に就き、須くその意を注ぐべし。堅を以て堅を御すれば、折れずんば則ち砕く。柔を以て堅を御すれば、堅も亦病せず柔も亦害せず。君と為りて柔ならざれば、臣その心を離る。父と為りて柔ならざれば、子畏れて疎んず。君父の間既に此くの如し。その余は推してこれを知るべし。兵事にありても、亦柔を用いずんばあるべからず。田單(中国、戦国時代の斉の将)の七十余白を復せしも、始めは処女の如くにあらざらんや。張良の高祖を輔けて天下を并せしも、貌婦人の如くにあらざらんや。湯・武の初め桀・紂に服事する。(原本、湯武初服事干桀紂は豈不柔乎)。是れ豈柔ならざらんや。当時、若し柔を用いざらしむれば、何を以て一たび怒って天下の民を安んずるに至らんや。是れに因ってこれを見れば、常に用うべきは柔なり。時あつてか剛を用う。故に曰く「柔中に剛あり 剛中に柔あり」と、強弱も亦然り。四つの者は時に随って可なり。ああ、柔の道は思いを致さずんばあるべけんや。夫の百練にして指を繞り(劉琨重贈盧諶詩、何意百鍊剛化為繞指柔)、色勵しくし

て内荏かなるが若きは、取るなきのみ。

以上

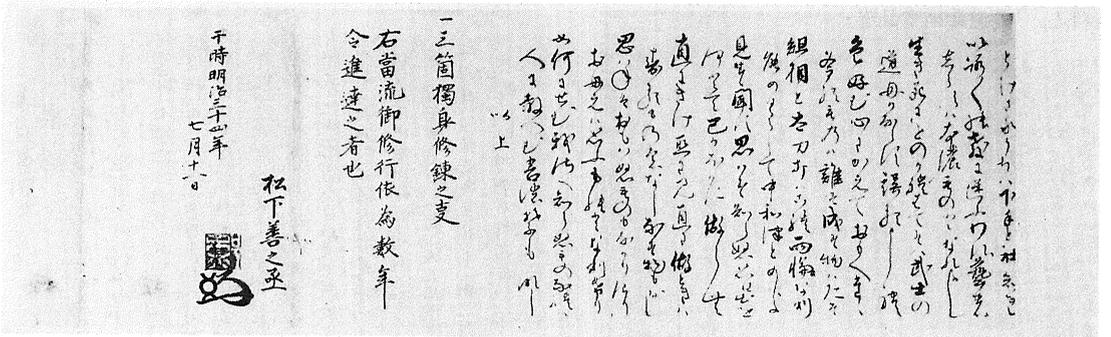
柔演

夫れ柔道の人に勝つ所以なり、理具わり心より未だ発せざる者、是れ天命の性なり。人手に業を交うるの間、必ずその性に循う所あり。当然の道にして発する者、是れ事なり。事理全しと雖も、固より己に能わざるあり。聖愚の齊しからざるは無し。但、生れて知る者は天下に鮮し、故にその事を品節し以て儀則表裏を立つる者は、是れ教なり。此の事を学んで習熟すれば、則ち以て天性の理を充つことを得べからず。いわゆる「天の命これを性と謂う。性に率うこれを道と謂う。道を修むるこれを教と謂う」。是れ此れとことなることなし。蓋し、業を交えて未だ互いにその変を為さざるの時、夫の理混然として心裏に在らば戒懼を失わざらんや。その未だ発せざる所、則ち偏倚するなし。天理常に存する、これを中と謂う。中、故にその変に遇うて発すれば、則ち必ず節に中る。これを和と謂う。人能く中和を極むれば、便ち事理二ならず、その所を待たず。自然に千変万化に応じず。その妙術得て測るべからざること神の如し。言う所「中和を致して天地位し、万物育す」者も亦同じからずや。朱子曰く「天地万物、本吾が一体。吾が心正しければ、則ち天地の心も亦正し。吾が氣順なれば、則ち天地の氣も亦順なり」と。是の故に天地と心気を同じうす。正しければ、則ち事理何ぞ充たざること有らんや。理なれば、則ち安んぞ知って事難きを得べけん。故に須く先づ習熟すべし。熟すと雖も、その理を知らざれば味きのみ。

以上

柔第

夫れ乾坤の間に性を稟くる者貴となく賤となく、寛柔温和の道德は天然に備え有つ所なり。是れに随順する、これを目して柔道と謂う。柔は天理に忤わず地義に戻らず能く明かなり。人仁これを柔徳と謂う。又、柔和は義理の公より出ずる本性の全徳なり。凡そ此の道は天下に盈充し能く柔は万物を成育す。故に柔は至大の道なり。乃至人及び草木禽獸尽く柔道より生ぜざるは無し。その生には柔軟にして、その死には必ず堅強なり。此れ即ち至道は能く柔に在り。且つ強大なる処は下、柔大なる処は上。既に諸道の大用は普く柔法よりす。故に先聖称して奥意となす。寔に此の道は天下これを知らざるなし。然れども、能く行う者は必ず希なり。又言う「柔道は至勝なり。則ち天下の至柔、天下の至堅を馳騁す」と。故に外剛にして内柔ならば、則ち変に應ずること能わず。外順にして内健ならば、則ち物慾容れず。慾容れざれば則ち身体安し。故に動静その変に應じ、剛柔その徳を全う



す。然る後能く柔弱にして剛強に勝つ。例えば水の湛々たるが如し。風これを蕩せば舶を覆すべし。勝兵は水に似たり。自ら能く山陵をも崩す。此れ柔の強を制する所以なり。これに因ってこれを觀れば、柔より剛なるはなく、静より動なるはなし。故に順理勵行してその中遷らざれば、則ち兆出透達す。然りと雖も、道器合和の極に至らざれば、則ち何ぞ応変自在なることを得んや。糞くは、門葉の倫、造次もこれを思い、それ克く本を努めよ。歛んで記す。

以上

いましめ 警

定めを破り法を侵すこと莫れ
 本を末とし末を本とすること莫れ
 負を憎み敵を擇ぶこと莫れ
 勝に移り分を忘れること莫れ
 敵を迎え敵とせらるること莫れ
 業に泥み理に倚ること莫れ
 得るありて得るありとする莫れ
 能を憎み悪を議すること莫れ
 己を愛し我に随うこと莫れ

以上

歌

無二無三万法帰一おもいけり
 ほかにこころのなとか移らん
 さりともと思ふ心の本とけて
 こころすずしき月をこそ見れ
 とやかくと思ふこころのうたがいに
 我が身の勝を敵にとらるる
 位相にはうしろもたれにすがり立ち
 手の出腰ひけ立身あしきぞ
 打突や払うもおなじ延辺の草
 ただ一すじを勉めてぞしる
 とに角に実にはなれぬものなるを
 はなれ安きは人こころなり
 かぜふけどうごかぬ峰の心せよ

いたれば山の位なりけり
 我が楯を破らぬものは我に有り
 正虚に乘じ敵はかつなり
 おそれてもおそるべきには武士の
 色の道との教えなりけり
 とにかくに心の業で有るものを
 何かつとめて何か成るらん
 世の中の人のかたきは外になし
 おもう我が身はわがかたきなり
 数々の業は多しというとても
 もと一体のものと知るべし
 勝つとても身より心をしぼり繩
 とけざるうちは下手とこそ知れ
 色々の教えに逆らう業芸の
 しらずば本のもとなれかし
 いきしにをのがれはずば武士の
 みちも必ず誤るとしれ
 色好むころにかえておもいたし
 いるものはたぞ成すものはたぞ
 組討と太刀打ちはこれ兩輪なり
 よくめぐらして中和つとめよ
 見ず聞かずおもわず知らぬ
 何とて己がほかに倣わん
 直にきけ直に見直に倣すときは
 するものもなし倣すものもなし
 おもわねば思わぬものもなかりけり
 おもいは思うものとなりけり
 いかにせむ我さえ知らぬものなれば
 人に教えん言う葉もなし

以上

三個獨身修練の事
 右當流御修行數年たるに依り、進達せしむる者也。

松下善之丞

時明治34年 7月11日

治乱ニ用テ明カナラハ是ヲ得
 ナルニアラサル也在テ出テモ乱テ
 モ是非此習ニ響キ移ツテ全キト所
 有之也至テ有無新旧ヲ分テ人知何
 トモ為ル吏無キ中ニ自然ト此不動
 體カ至トオツテ明妙ナルリト語一
 多心ヲ盡カス初ハ口授ニ有リト云々

非道ヲ做シルヲ無害ト云唯其
 ヲ養フト云リ活然ノ氣集義ヲ生レ健
 悍ノ氣不動体ヨリ生レ故勇猛ハハ
 不動体ニ隨テ魂空ノ血氣ナシ然レ
 聞此金剛體一身ニ流行シテ大觀ハ一
 シ然ト起テ寂然ト不動心賦リ聞
 イテ辨テマシロカナル所歟此不動体
 ユキ當ツテ別ノレト碎クル也之是

氣ヲ制シ義ト道ト配セテ山々僻々
 然ノ氣ヲ生スル事能ク入其緒キヲ
 以テ氣ノ大魁ヲ養テ海ヲ各テ大地
 ヲ能ク失剛強ノ氣道義ニ隨ツテ邪
 ヲナキ時一身ニ充滿シテ全キ也或ハ未
 元ナル時ハ集義ノ知未至不動體未
 奠セス其魁ルコト極深セサルト心得

『直信流柔道業術書』(資料2) 46)

本意

近来世間の人 柔の道を組相の事にして人を投倒することのみ心得一既に見誤て自由の本意を取り失へり 夫柔は物に癖す拘す争す逆す自由轉變にして柔和忍辱の道法也 最も起居動静拳手動足も皆柔得に非ずと云うなし 然も能く是を知得する者鮮し 是を事術に移し修行する時は 最初に剛を用て柔に入るの門とす 此剛健に秘傳有之取なり 三略に田能剛能柔柔中剛剛中柔是肝要にして剛柔一和の柔也(剛柔能用ゆべき所へそれぞれ用なり)。是皆業の導とする所なり 其の術たること組討刀劍の鳥の両翼の如くすべし 一を用ひて一を捨てからず 能く兼ね全して其の場其の場 宣く之を并做すべし 組相する時は刀劍を後備柔と雖も離可不 是を修せされば離れ修する時は離る克なし 又道は踏所とも(皆踏所。道自己故。以ていたるべし 真理は三中道にあらずと云うなし) 云り 此柔を踏て柔に随ひ其踏所則柔道也 偕又柔の勝れたる所天下の至柔は天下の至堅を馳騁す(孝子43章)と云り 風よく大木を抜き水よく大船を覆す 天下の柔は水に過たるはなし 水は至て柔か也と云も烈火を消し千丈の堤も壊ること有 是に依て観は之柔より剛なるはなし 然れども威無して柔なれば水の弱か如し剛にして柔を守るを至強と云 柔能制剛弱能制強する 帷幕の術天下是を識すと云こと無し 然れども之の行者必ず鮮し 至道は能柔にあり 強大は下に處り柔大は上に處る 是を以て柔道に思を致さざる可けんや 其術に至る人元より業は氣を以て修す(氣を以て心を知る) 氣を以て心を知るも物の序也 氣修煉たる時は心おのずから安し ざるによって今手を下す 取は先氣の滯をといて心を平にす 亦氣を活して心の自在をなす 當習の不動慣(不動体・不動智一和するを不動慣という)は業にも通じ理にも達し中央なれば也 夫中央は事々毎々に有り 全く組に偏せず釵に倚せざる所也 故に二業万技あい備て自在也 中央は至極のなかは道理にあたと云事也 中央を

柔道と云 異名として中央と云り 言に中央聞くに中央見るに中央有り 故に此の中央を假に一書の題号とも之をなすと云爾

精粗

不動體健悍心中正の傳は柔道的一端也と云も業の本立理の端也(柔道と云は自由・自在にして心を入れてするうにあらず 本来の柔なり 然るに不動体健悍は柔に入るの門流なり 熟して無心・自然の柔道に至るも此不動体健悍を勉て至なり) 五体五臓の根本病氣の療養勇猛健悍の調育亦人体のつり合一身の宝物なり 故に此敬定は事的術元として己れ堅固に取作一和たるの本文なり 又此本然は氣にして遣い心にして做其用不断の嗜し志しの専一也 諸縁を息内心喘の事なり 牆壁の如にメ以て道に入るべし 能綿密に肯諾すべし茫然としては正念絶すと云り 事術は須 健悍なるべし 敬定の習を一向に務るうちより大本の柔道を開く 純一無雜主一無適は道に入るの始め業を勉む専一なり 是能一機の實を知る折成一片の工夫外敬義を能守らざれば萬事 徒となること多かるべし 誠に不動慣に精粗の二つ不動と剛く制して内に闔るも亦一つの習也 又意見の到る所に随て闔るに心無くして自ら心裏に道以て主となるる 皆方境に触れても不懼不惑して心意動くこと無し 心の主となるを以て萬事に応ず 然と云も分に随て足もとを修せよ 身に相應の心遣いを可做仍之敬正不動体初中に敢て能之勉よ

運轉

天地神明物と推し移る無事始動隨時宜應變まことに柔は九地に蔵し 剛は九天に出づ組なる乎 劍なる乎 中央に至る剛柔劍組は糾る纏の如し 善く仕為者は人を致して人に致されず能敵人を使う 善く人を奪って人に奪われず奪は心の機也 自ら至らしむれば是を利す敵弱きを知るは剛きを以也 強きを知るは柔かなるを以て也 柔は剛強は弱なり又剛柔は鉄の如し 強弱は石の如し 能

練能磨き克静に是守り克攻て必ず勝者は具守らざる所を攻ればなり（克は勝て静にかつて動きかつてまもり克てせめると忘なり）守て必ず固き者は其攻にさる所を守れば也 故に善攻る者は敵其守る所を知らず〇て能保つと発すると（〇は不明）

移響

不動體は一め小けれども力を重くして人の本なりと書けり 故に常に本を勉むると云り 其習初めは〇傳と云も務むるに随て徳重なる人事の本となる所以なり 寔に人倫生たるの時刻臍帯より元気を請留たれば臍下は氣前の根本也 氣は一体に満ると云ども此氣より分つて一身に之有也 體は氣に因て動き氣は心の向う所に随う（氣は是非も心よりつかうものなり 又氣よりして業をなすなり 氣は卒志は大將なり 志は氣の師なりと云て氣の大用也と云うなり 志は氣をつかうものなり 心にもあらず心氣のあいだなり） 故に志し能して氣一身に満る時は業全く自由なるべし 不動慣は内外より示すが故に究て丈夫備つて其靈妙多かるべし 事理合一動靜なれば不斷常住の工夫にして能々是を肯諾すべし 象より入ることは名相を假を其心を示す有為を以て無為の理施す也 唯持敬存養以て 十氣の實を得る 然して技則自在なるべし 寔に直信の大事を開きては如何ともすること無し 大虚不測自然の妙用也 然れども此不動體を至極せざれば直信あらはれず 大念起らず 諸念体べからず 備不動體に方身円身とて象に二品の習有円身は勉て力有方身は努てたより無し 然れども方身は正徳の丈夫なり 円身は用端には宣しと云も又不自由なる取も之有也 年月勉るに随て方身の自由円満なる事を知らざれども方円唯一途なり 菟に角に此傳純一に工夫肝用なり 必ず心をすましてのみ観るに非ず 乱る中に治るを知り 治る中に敗ることを知る 動靜氣を制し義と道とを配せて山を砕く氣力を養う動議を襲て私意なれば浩然の氣を生ずる事能くす 自其縮きを以て氣の大魁を養ひ渤海を吞て大地を抜き能其剛強の氣道義に随つて邪まなき時は一身に充滿して全き也 或は未充ざる時は集義の功未至不動體未熟せず 其勉ること積累せざると心得非道を做さざるを無害と云 唯直みを養うと云り 浩然の氣集義より生る健悍の氣不動體より生る 故に勇猛心は不動體に随て頑空の血氣なし 然る間此金剛體一身に流行して大観すべし 泰然と起て寂然と不動心眼を開いて眸子ましろかざる所敵此不動體にゆき當つて則をのれと砕くる也 又是治乱に用て明かなら子は是を得たるにあらざる也 狂て出ても乱ても是非此習に響き移つて全きと云所之有也 至て有無新旧を分たず如何とも為る真無き中に自然と此

不動體が主となって明妙なるぞと諾べし 多心を盡さず 祕は口授に有りと云々、とある。

5. 結語

- 1) 柔術という名称は、老子の思想で極尊された柔の徳に基づく「柔能剛制、弱能強制」や三略の「強弱・柔剛説」にルーツがある。そして「柔は柔順の義にて、此形をして能く心に柔順ならしむるの方術と云意にて柔術と名付けたるなり」とあるように、柔術の技法が相手に順応して技を施すという技の根本原理（柔の理）と思想が合致するところから用兵以外の思想的表現を用いている所に術名の特徴がある。
- 2) 直心流柔道の修行目的は、直心流柔術開祖・寺田勲右衛門正重満英碑『桃好裕節山 撰書』（清光院・松江市）に「これを修練すれば不動智の位に至り、心虚して千変万化に應じ、不動智の自由自在の境地を体感し、日常生活において恥辱とらない技及び道を習練するものであり、始は姿勢を正して数百の業に達した上で丹田の心気を養い、鉄石も砕く氣象を具えて不動智に至り平常心を養うものである」⁴⁷⁾とあるように、直心流柔道は業の修練を通して鉄石をも砕く氣象を具えた不動心・平常心を養うことを目的としている。
- 3) 起倒流；本体・天の巻・地の巻・性鏡の秘伝書、登假集が仏典や儒学（朱子学）や易学の語によって説かれているのに対し、直信流柔道業術寄品巻では「天に陰陽あり、地に剛柔あり。柔は陰に属し、剛は陽に属す。陽中に陰あり、陰中に陽あり。故に剛中に柔あり、柔中に剛あり。剛と強とは柔と弱とに類す。此れに類する四つは、各用うる所あり。剛強の柔弱に勝つことは、人皆知るところなり。然れども、柔剛を制し弱強を制するも、亦是れその理無きにあらず」（柔説）、「人能く中和を極むれば便ち事理にならず、その所を待たず。自然に千變万化に應ず」・「天地万物、本吾が一体。吾が心正しければ、則ち天地の心も亦正し。吾が氣順なれば、則ち天地の氣も亦順なり」（柔演）、また直信流柔道業術書では「夫柔は物に癖す拘す争す逆す自由轉變にして柔和忍辱の道法也。最も起居動靜学手足も皆柔道に非ずと云うなし」（本意）⁴⁷⁾のように、同じ起倒流系の柔術でありながら起倒流伝書と異なり、多くが易学や朱子学等によつて直信流柔道の目的が説かれているところに特長がある。

参考文献及び引用文献

- 1) 加納治五郎, 柔道一斑並に其教育上の価値, 渡辺一郎, 明治武道史, 人物往来社, p.82, (1971)
- 2). 3) 同上, p.81
- 4) 綿谷雪, 図説・古武道史, 青蛙房, p.257, (1967)
- 5) 同上, p.83
- 6) 気楽流拳法, 柔術秘術之伝, 日本武道体系, 第六卷, 老松信一他, 株式会社同朋舎出版, p.519, (1982)
- 7) 登假集, 日本武道体系, 第九卷, 今村嘉雄, 株式会社同朋舎出版, p.455, (1982)
- 8) 大日本柔道史, 丸山三造, 講道館, p.12, (1939)
- 9) 日夏繁高, 本朝武芸小伝, 正徳四年 (1714), 山本家蔵
- 10) 日本武道全集, 第三卷, 今村嘉雄, 人物往来社, p.15, (1966)
- 11). 12) 同上, p.15
- 13) 関口流, 日本武道体系, 第六卷, 老松信一他, 株式会社同朋舎出版, p.151, (1982)
- 14) 渋川流・柔術大成録, 日本武道体系, 第六卷, 老松信一他, 株式会社同朋舎出版, p.336, (1982)
- 15) 直信流柔道業術寄品巻・柔第, 松下善之丞, 明治34年 (1901), 梶川家蔵
- 16) 渋川流・柔術大成録, 日本武道体系, 第六卷, 老松信一他, 株式会社同朋舎出版, p.336, (1982)
- 17). 18) 起倒流, 日本武道体系, 第六卷, 老松信一他, 株式会社同朋舎出版, p.377, (1982)
- 19) 同上, p.378
- 20) 同上, p.381
- 21) 同上, p.383
- 22) 同上, p.373
- 23) 同上, p.375
- 24) 同上, p.381
- 25) 登假集, 武道の名著, 渡辺一郎, 東京コピー出版部, p.177, (1979)
- 26). 27). 28) 同上, p.183
- 29) 同上, p.175
- 30). 31) 同上, p.176
- 32). 33) 同上, p.180
- 34). 35). 36) 同上, p.182
- 37) 同上, p.175
- 38). 39) 同上, p.176
- 40). 41). 42) 同上, p.177
- 43) 同上, p.179
- 44). 45) 同上, p.180
- 46) 直信流柔道業術書, 松下善之丞, 梶川家蔵
- 47) 直信流柔道開祖・寺田勘右衛門重満碑『桃好裕節山撰書』(清光院・松江市)